
神魔戦記録

風下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神魔戦記録

【Nコード】

N15500

【作者名】

風下

【あらすじ】

崩龍寺ほうりゅうじと言うお寺に生まれた少年、崩龍寺昌也ほうりゅうじ しょうやはある日、古い蔵の中から一本の珍しい刀を見つけたそれから彼の平和な日常は大きく変わって行く・・・

プロローグ（前書き）

初めて、投稿しました風下かぜしもと申します。
駄文ですがよろしくお願いします。

プロローグ

とある20代後半ぐらいのOL風の女性が、深夜遅くに、白色の同じようなマンションが、多く並ぶ団地の近くを疲れた様子で歩いていた

「はあ、また残業で遅くなっちゃった全く、最近部長が、私にやたらと仕事を押し付けて来るから・・・」

つとぶつと仕事の文句を言いながら団地の中にある公園を通り過ぎようと中に入って行った、公園のちょうど真ん中ぐらいに差し掛かった時にいきなり後ろからちよつとそこの綺麗なお姉さんと軽薄そうな男の声がかけられた

（はあ、なによあ、こんな時間にナンパ、私本当最近ツイてないなあ）

彼女は心の中で自分の不運さに嘆きながらも声が聞こえた方に

「何ですか、今急いでいるんですけど」

つと不機嫌な態度を隠さずに言いながら振り返るとそこには、少し古ぼけたジーパンを履いて黄色っぽい上着を着て上着のフードを顔の上半分が見えない位に深く被っている男が石で出来ているベンチに座っていた、彼女が振り返るのを確認すると男は口をまるで三日月の様にしながら笑いながら

「ヒヤハハハハ、ビンゴだぜ！」

つとつと男は横に置いてあつた槍を手に持つと彼女の方に向けると

「ねえ、お姉さん、一緒に遊びましょう!!」

そう言い放つと男は槍を構えて彼女に突っ込んで行つた、そして彼女は訳も分からず向けられた刃が自分の胸に吸い込まれて行くのを見ながら意識が闇に落ちていった

第1話 平穏な日々(前書き)

2ヶ月以上かかってようやく1話目が投稿出来ました!!
クオリティーがあり得ない位低いですがどうか広い心で見えて頂けると嬉しいです!!

第1話 平穏な日々

黒板の前で、四十代ぐらいの男が、黒板向かって文字を書いている
すると書き終わったのかくると180°回転し自分が、黒板に書
いた文字を必死に書いているであろう生徒達の方に向き直すと

「ええ、であるからして、この次の文章は・・・」

つと自分が書いた文章の説明を始めるとキーンコーンカーンコーン
つと授業を終えるチャイムがなり響くと男は

「仕方ない次回の授業は今の文章の場所から始めるから予習をして
来る様に」

つと言い残し教室を出て行った、教室の中は教師の男が出て行った
ばかりなため少しの間静寂を保っていたが次第に話しをする声が飛
び交いあうその中でただ一人、授業が終わった事も知らずに、スヤ
スヤと寝息を、立てながら寝ている坊主頭より少し長めな髪型の少
年がいた

「おい、昌也（まなや）昼メシ食いに行こうぜ」

つと同一年位の赤茶色の髪をした少年が、話しながら寝ている少年
昌也にちかずいて行った、少年は昌也の前に立つとやれやれと言っ
たポーズをとり

「さてと、今日は、どうやって起（お）そうかなあ〜つと、おっ良い物
発見！」

つと昌也の机の上に置いてあった、教科書を手に持つと、垂直に構えニヤリと笑いながら

「教科書アタック発射3秒前」

つと言つと左手の指を三本立てて3、2、1、つとゆっくり指を一本ずつ曲げて行き三本とも曲げると

「発射」

つと掛け声と共に昌也の頭の上に教科書を降り下ろした、ガスンと鈍い音を響かせると昌也はギャーつと声を出して教科書で叩かれた箇所を押さえながらプルプルと震えていた

「起きたか？」

「起きるわ！！！！逆にこれで起きない奴がいたらこの崩龍寺さんが直々に出向いて賞状を渡して涙を流しながら拜んでやるよ！！」

「訳の解らん事言つてじゃあねえよ、むしろ寝てたお前を起こしてやった俺に感謝しろよな」

「出来ねえよ！！俺を教科書の端の部分で殴った奴にどうやったら感謝が出来るのか作文用紙三枚で簡潔に説明してみろ！！」

「角で殴つて殺つて無いただけましたと思うがなあ」

「殺るきだったのかこの野郎ー！！」

起きるなりいきなりハイティションな会話をしている二人をクラス

メイト達は、また始まったのかやよく飽きずにやるよなあ〜や加山くんカツコイイ〜!!など皆々に温かく?彼らの事を見守っていた

「ぜえぜえ、で何の用だよ裕之俺の快適な眠りを邪魔して起こしやがってよ」

つと起こされたイライラを隠さずにドスの利いた声で質問と不満を目の前の少年、裕之にぶつけると裕之はくるりと背を向けると

「何だよ、人がせつかくこの間借りを返してやろうと思ってるよ」
「やったのによお〜」

「借りをつて何のだ？」

つと訳が分からないと言ったふうに首を少し傾げるとカクつとコミカルな音が出そうなコケ方をするとはあくつとため息を吐くと昌也の方に向き直し

「商店街、不良、路地裏、乱入、つまんねえ〜事してるんじゃ」「さあ〜ご飯を食べに行こうでわなにか裕之君!!」「」

つとぶつぶつと裕之が、独り言の用に呟いているのを聞いていた昌也が急に裕之の口を塞ぎながら教室から連れ出して食堂の方に共に走って行くのを周りのクラスメート達は静かに見送っていた心の中で

(あの二人に一体何があったのだろうか〜?)

つと疑問に思いながら。

~~~~~

「全くいきなりばらそうとしてるんじゃないやあねえよデメエー」

「良いじゃんかよ、俺達の輝かしき出会いじゃあねえかよ、何食う？」

「輝かしきつて、キモイぞお前、豚カツ定食」

つと昌也と裕之はお互いに軽口をたたきながら食券を買い、買った食券を食堂のおばさんに渡すとおまちとおさまと言ってまるでどれを食べるのか分かっていたかのような素早さで頼んだ料理が出てきたが二人はそれを気にせずそれぞれお盆に乗せて適当な席に向かい合わせに座ると昌也は豚カツ定食を裕之は日替わり定食を食べ始めた

「そう言えば昌也知ってるか連続婦女殺人事件」

「うん？、ふうんだほれ」

つと裕之は昌也に聞くと昌也は口いっぱいに豚カツを含みながら答えたとすると裕之は口にメシ詰めながら喋んなよとため息をつきながら言つと先ほどの説明をし始めた

「まあ、俺もクラスの奴に聞いた話しだからそこまで詳しく無いだが、何でも関西の方で最初の事件があったらしいがほとんど東京に近づいて来て最近この辺りの駅前団地の公園でOLの女性がそいつの手によって殺害されてたらしいだよ」

「ふうん、でもなんでそのその連続婦女殺人犯がやったって分かるんだ？」

「何でも相手の殺し方が同じで一撃で心臓を刃物でグサリと殺ってるんだとよ」

「うわあゝ、メシ時に聞く話しじゃあ無かったあゝ」

「まあ、そう言う話しが有るって話しさ別に狙われてるのは女性だけだから俺らには関係ない話しだがな」

「だなあゝ、御馳走様でしたと」

つと昌也は両手を合わせて食事を終わると先ほどまで喋っていて食べていなかった裕之は食べるのはや！っと言って食器を片付けに行った昌也を追いかけるようにご飯をかきこむんであった。

その後二人は残り少なくなった休み時間を教室に戻りくだらない話しをしながら共に過ごした。

~~~~~

「最近は何事もないから放課後は寄り道せずに家に帰るように」

午後の授業が終わり、帰りのホームルームで担任の教師が来週の予定や注意事項を言い終わると教室から出て行った。

昌也は手早く荷物をまとめると素早く教室を出て下駄箱に早歩きで向かって行ったすると教室方から

「おい、昌也帰りにどっか寄って行くこつせえ〜ってもういないし
!?!」

と裕之の悲しい叫び声が聞こえた。

~~~~~

あれから下駄箱で靴を変えて学校を出てから歩いて30分ほどにある昌也は山の上に向かって出来た長い石の階段を登っていた

「くっそ、いつも思うがバカみたい長い階段だよなあ〜」

つと愚痴を良いながらも登って行くと階段が終わると目の前には上に崩龍寺と書かれた横看板が付いた大きな門が閉じた状態でそびえ建っていた。

「……………はあ〜」

つと門を見ていた昌也はため息をつきながら扉を体が少し通れる位に開けると顔だけ出してキョロキョロと辺りを見渡すと異常はなかったのかほつと安堵の息を漏らすとコソコソとまるで盗みに入った泥棒のように入って行くとガシツつと昌也は肩を何者かに掴まれるとギギギギつとまるで壊れたブリキの玩具の様に首を掴まれた肩の方に向けるとそこには白髪頭の齡 80才ぐらいの老人がまるで仁王像のような恐ろしい表情をして立っていた

「ま〜〜〜さ〜や〜」

「な、何だよじいちゃん」

「貴様、わしとの約束を果たさずに何処へ行っていた!」

「や、約束って何の事かな」

つとあからさまに怪しげに口笛を吹きながら昌也が答えるとはおつと言つと老人は80代とは思えないスピードで前に回り込み昌也の右腕を取ると一本背負いで投げ飛ばし昌也は地面に綺麗に背中から落とされた

「いつ〜てえ〜、いきなり何すんだよじいちゃん!」

「ほお〜、不意討ちに投げられても、受け身は取れる様になったか少しは、腕を上げたよのお〜、昌也よ」

「毎回、毎回、ポイポイ投げられてれば、嫌でも受け身の一つぐらい取れる様になるってつう〜の!」

「ふむ、ならば少し本気を出して身体で昨日の約束を思い貰おうかのお〜」

つと言いながら老人は上半身の服を脱ぐ80代ぐらいとは思えない鍛え上げられた肉体だった

「クソつたれ、やって殺るよ妖怪ジジイが今日こそ成仏させてやるぜ!〜!」

「来るが良い小童が、きつく灸をすえてやるわ!〜!」

その後、彼らの闘いは二時間以上に及びその昌也の母が来て、その場を抑えこむと老人と昌也は、二人してお説教を受け日曜日に仲良く二人して蔵の掃除をする事になった。

第1話 平穩な日々(後書き)

良かったら、感想等を、よろしくお願いいたします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1550o/>

---

神魔戦記録

2011年1月3日22時11分発行